The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	16世紀後半の詩集における時の経過
Author(s)	濱田, 明
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 85-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

16 世紀後半の詩集における時の経過

濱　田　　明

はじめに

16 世紀、人口の 9 割を占めていた農民にとって、時間の単位それ自体はあまり意味をもたなかった。フランス語の «jour»「日」にしても、一日全体よりは、日の出から日没までの時間が農作業には重要であって、季節によりその長さも異なっていたことから、彼らの生活は、時間の単位より自然の光に従っていたと言っていい。「世紀」は人々の人生にとってはあまりにも長すぎる単位であり、「年」は天変地異とともに記憶される程度で、むしろ「月」や、気候と結びついた「季節」が重要だった。彼らにとって時間とは、昼と夜、種まきから収穫へ到る一連の農作業の繰り返しが作る、いわば循環する時間であったのだ [1)]。

中世から規則的な時間に従っていたのは、教会、修道院などであった。自然の太陽の運行ではなく、天地創造から終末へ神が定めた大きな時間の中で、キリスト教の祝祭日に、また一日の間でも定められた時間に祈りが捧げられた。そんな神中心の時間から人間の時間へとは言い過ぎにしても、『ガルガンチュア』でのポノクラート先生が施す教育法は興味深い。それまで朝遅くまで眠っていたガルガンチュアも、朝 4 時に起床し、聖書の朗読を聞き、トイレからの帰りには空模様を観察し、講義の後には体を鍛える。頭と体をバランスよく鍛え効果的に学習するためには、規則正しい勉強のリズムに従うことが重要なのだ [2)]。

ラブレーの作品からさらに、今日ルネサンスと呼ばれる時代意識が明確に表現された有名な箇所を紹介しよう。『パンタグリュエル』でガルガンチュアが息子パンタグリュエルへ宛てた手紙である。ここでガルガンチュアは、自身が教育を受けたのはまだゴート族の破壊の影響の残る時代であったのに対し、自分の治世の間に印刷術が発達し、パンタグリュエルが生きる現在は、「学芸にも光輝が取り戻され」、新時代を生きているという意識に溢れていると言う。しかし、時代の新しさは、印刷術などの新しい技術だけではなく、「それを知らずにして、知識人を自称するなど恥ずべきことであるギリシャ語をはじめとして、ヘブライ語、カル

1）Robert Muchembled, *Culture populaire et culture des élites dans la France moderne*（*XV*^{e}*-XVIII*^{e} *siècle*, Flammarion, 1978, pp.62-64. また「生きられた時間と単位としての時間」のうち優位に立つのが前者であるとリュシアン・フェーブル（高橋薫訳）『ラブレーの宗教―16 世紀における不信仰の問題―』法政大学出版、2003, p.476 は教える。Jean Granier, *La mesure du temps*, PUF, 1943 は時間の単位の変遷を、福井憲彦『時間と習俗の社会史』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1996 は、歴史、キリスト教の祭りを通して、フランス近代社会における時間の見取り図を示している。

2）フランソワ・ラブレー（宮下志朗訳）『ガルガンチュア』筑摩書房（ちくま文庫）、2005, pp.189-211.

ディア語、ラテン語」といった古代の言語の研究を通して見出されるべきものと説く[3)]。

プレイヤード派と呼ばれるロンサール（1524-1585）、デュ・ベレー（1522-1560）などの詩人たちが、まさしくこの手紙で示された人文主義的教育を受けた世代だ。拙稿では、イヴォンヌ・ベランジェの研究を参考にしつつ[4)]、まずローマでの滞在を契機に書かれたデュ・ベレーの作品を、次いで1550年代以降盛んに出版された恋愛詩集を対象に、16世紀後半の詩集における時の経過を考察したい。

I. デュ・ベレーとローマ

ジョアシャン・デュ・ベレーは、『フランス語の擁護と顕揚』（1549）で古代の模倣の重要性とフランス語による文学の可能性を主張したことでまずその名を知られる。数冊の詩集を出版した後、1553年6月から1557年8月まで、ジャン・デュ・ベレー枢機卿に随行し、秘書としてローマに滞在する。文化の都を訪れるだけではなく、ローマでの働きを出世の糸口としたい気持ちがあったとされる。詩集『ローマの古跡』（1558年）では、ローマはどのように描かれているだろうか[5)]。

新参者よ、ローマにローマを探しては、
ローマにローマのかけらも見出せぬ者よ、
おまえが目にするこれらの古い宮殿、凱旋門、
そして古い城壁、これがローマと呼ばれるものなのだ。

見るがいい、傲慢と廃墟のあり様を、
世界を自らの支配下に置いた都市が
すべてを支配した挙句、いかにして時に支配され、
ついには万物を無にする時の餌食となったかを。（p.7, III, v.1-8）

空間としては同じローマでありながら、時間の経過によって過去の栄光を失い、

3）フランソワ・ラブレー（宮下志朗訳）『パンタグリュエル』筑摩書房（ちくま文庫）、2006, pp.110-111.

4）Yvonne Bellenger, *Le jour dans la poésie française au temps de la renaissance*, Gunter Narr Verlag, Tübingen, 1979は 博士論文をコンパクトにまとめ、時間に関する語彙の詳細な分析を行っている。本論の執筆に際しては、Yvonne Bellenger, *Le Temps et les jours dans quelques recueils poétiques du XVIe siècle*, Honoré Champion, 2002を大いに参照しており、その結果、詩の引用も重複する場合も少なくない。その意味で、拙稿は論文というより、解説に近い内容であることをあらかじめお断りしておく。なおプレイヤード派に関する必読文献には以下の邦訳がある。イヴォンヌ・ベランジェ（髙田勇、伊藤進訳）『プレイヤード派の詩人たち』白水社、1980.

5）*Les Antiquités de Rome* および *Les Regrets* の引用は以下の版に拠り、ページ数の後、ローマ数字でソネットの番号を、次いで詩行を示す。Joachim Du Bellay, *Œuvres poétiques*, éd. D. Aris et F. Joukovsky, Classiques Garnier, tome II, 1993. またデュ・ベレーのイタリア体験及び『哀惜詩集』の訳詩については、平川祐弘『ルネサンスの詩』講談社（講談社学術文庫）、1987が参考になる。

栄華を誇った古代の面影はなく、今やただ廃墟が残るのみだ。過去の「傲慢」を現在の「廃墟」に変えたのは、「万物を無にする時」である。ここで詩人はローマを見る者を「新参者」とする。ために廃墟は強烈な印象をその目に与えよう。またこの「新参者」がローマを「探す」のは、古代ローマの盛名をあらかじめ知っていればこそである。それゆえ、味わう当惑や落胆は大きい。「新参者」の視点には、古代の詩人を通し偉大なローマを知っていたデュ・ベレーならでは巧みさが見られよう。

もっともデュ・ベレーは、廃墟を嘆くだけではなく、時を越え、古代の栄光を現在まで伝える古代の詩人達を讃えることも忘れない。次のソネットでは、古代の建築の残骸を「墓」から引き出される遺骸と形容したあと、ローマの詩人たちの営みを対照的に讃える。

もはやローマは存在しない。たとえ建造物が今も
ローマの影を垣間見せるとしても、
それは、夜中に魔法の術によって
墓から引き出される体のようなもの。（中略）
しかし、詩人達の書物は、
時に負けず、墓から最も美しい栄誉を引き出し、
この世にその姿を見せるのだ。（p.8, V, v.4-8 et v.12-14）

ローマの詩人達は「時に負けず」、「この世」すなわち現在に過去の栄光を伝える。この賛辞の対象は、ローマの詩人に限られるだろうか。そこには、言葉の職人として王侯に仕えた中世の詩人に対し、自分達の世代の詩人は、古代の詩人と肩を並べ、言葉によって時間に打ち勝ち、永遠をもたらす存在であるとの自負が窺えよう。

『ローマの古跡』で、古代から16世紀という大きな時の経過の中に古代ローマの栄華を破壊する時の力を確認しているのに対して、『哀惜詩集』（1558年）では、フランスを離れローマに滞在するデュ・ベレー、正確には詩集における「私」にとっての時の経過が問題となる。ロンサールに呼びかける次のソネットでは詩作の時期が明示されている。

辛いものだ、プロメテウスさながらに三年余りも、
アヴェンティーノの丘に縛られるわが身を見るのは。
奴隷の身となっているのも、愛のくびきではなく、
哀れな望みと、残酷な運命によってなのだ。（p.44, X, v.5-8）

自ら望んだローマ行きであったはずが、「三年余りも」と、「辛い」時間としてその長さが強調される。望みは叶わず、今や「哀れな望み」と認めざるを得ない。以後のソネットでは、故国フランスを懐かしむ一方、権謀術数に明け暮れる教皇

庁を風刺する詩篇が続く。その間、フランスは、郷愁の過去、そして帰国後の未来として存在していた。しかし皮肉なことにいざ帰国してみれば、フランスの宮廷にも媚びへつらいが蔓延している。今やフランスにもはや過去も未来もなく、相も変わらぬ日常が繰り返されるばかりだ。

このように、デュ・ベレーの詩句は、ローマを通して、ルネサンスという時代の意識と個人の時の経過を垣間見せてくれる。

II. 恋愛詩集における時の経過

恋愛詩集については、ギリシャ・ローマの詩人達の作品以上に、ラウラへの愛を多くのソネット（14 行詩）で歌ったペトラルカの『カンツォニエーレ』がフランスの詩人たちのモデルとなる。10 行詩ながら、フランスでは初めてひとりの女性に捧げられる形で書かれた恋愛詩集であるセーブの『デリー』（1544 年）、フランスで初めてのソネット集であるデュ・ベレーの恋愛詩集『オリーヴ』（1549 年）など枚挙に暇がないが、ここでは 1552 年にロンサールが発表した『恋愛詩集』における時の経過について考えてみたい。

1. ロンサール『恋愛詩集』（1552 年版）

（1）神話の時間

いつの時代でも人は恋をすると、落ち着きを失い、いつもの自分でないと感じるものだろう。古代では不可思議な現象は神の力によるとされ、ローマ神話では、愛の神アモルの登場となる。恋に落ちるのは愛の神が放つ矢に射抜かれるため、その結果、愛の神、弓矢に関連した比喩が恋愛詩集に散りばめられることになる。

ペトラルカもラウラを神々しい存在とみなし崇拝していたが、ロンサールが歌い崇めた女性はカッサンドルといい、トロイ王プリアモスの娘の名前（カッサンドラー）でもあった。そこから、弓矢も愛の神が放つ恋愛の比喩にとどまるだけではなく、トロイ戦争の弓矢とも結び付けられる[6)]。

わたしを攻めるカッサンドルよ、
私はミュルミドーンの、ドロプスの兵士ではない。
また人を殺める矢でおまえの兄を殺し、
おまえの町トロイを灰にした射手でもないのだ。（IV, p.8, s.4, v.1-4）

またトロイ王プリアモスの娘はアポロンから予言の力を授かりながら、彼の愛を拒んだためその言葉が人々に信じられることはなかったと伝えられている。『恋愛詩集』では、詩人は自らの恋が報われることなく死を待つというカッサンドルの言葉を受けると、その言葉を神話のトロイの王女の予言と結びつける。

6）ロンサールの引用は初版を収めた以下の版に拠り、巻数、ページ数、ソネットの番号、詩行の順で示す。Pierre de Ronsard, *Œuvres complètes*, éd. Laumonier, S.T.F.M., 1914-1975. 訳出に際しては、高田勇『ロンサール詩集』青土社、1985 に訳文がある場合は利用させて頂いた。

純潔なそして本当に憐れみに満ちた予言者よ、
私に警告しようとおまえはしばしば予言する、
おまえに奉仕すれば私はいつか死ぬことになると。
だが、不幸なことにおまえを信じる者はいない。（IV, p.37, s.33, v.5-8）

しかし続く詩句で、詩人はカッサンドルの言葉が真実であり、いずれ自分が彼女の愛のために死ぬことが分かっていると認める。過去の物語である神話は、現在進行中の恋に、そしてその恋の未来へとつながるものとして巧みに用いられるのだ。

ちなみに神話的世界と結びつけられるのはカッサンドルだけにとどまらない。以下の詩句では、詩人の欲望が神話的世界で繰り広げられる。

なみなみと黄金の雨と化して、
わが美女カッサンドルの美しい胸に、
一しずくまた一しずくと降りて行きたい、
彼女の眼に眠りが忍び込んでゆくときに。

まやかしの牡牛に姿を変えて
巧みに彼女を手に入れたい、
最もやわらかい草ふみしめて、
独りはなれてさまざまな花を摘むときに。（IV, p.23, s.20, v.1-8）

ここで恋する男は、塔に閉じ込められているダナエと交わり、またエウロパを誘惑したユピテルと同様の変身を願う。「私」と「彼女」の世界で展開する時間も、神話のユピテルの行為が明瞭に想起されているため、神話の行為の時間と重なるように進む印象を与えないだろうか。

そもそも連作ソネット集にあっては、ひとつひとつのソネットが固有の時間を構成することから、連作ソネット全体の物語内容を想定してその時間の連続性を再構成することは難しい。『恋愛詩集』には神話的な時間が現在の愛を語る時間と重なる形式で書かれたソネットが少なくない。そのため、神話は語られる出来事が読者に想定させるような線状的な時の経過とは別の次元の時間をソネット集に持ち込んでいると言えるだろう。

(2) 恋愛の時間

16 世紀でも、知り合ってしばらくしてから、またいつの間にか女性を好きになることもあっただろうが、ペトラルカの『カンツォニエーレ』以後、恋愛詩集では、出会いが運命的な瞬間とされる。ちなみに、フランス語の批評でも恋に落ちた時についてはイタリア語 innamoramento を使い特権化されている。詩集の中で

の出会いは、時間の起点となるだけではなく、現在から繰り返し語られる。『カンツォニエーレ』の構成はラウラの死によって第一部と第二部に分かれるが、フランスの詩人の作品ではこれには従わない詩集も多い。ロンサールのカッサンドルをはじめ、女性は美しくも冷酷であり、今にも死にそうなのはもっぱら詩人のほうだ。

時の経過という点から確認すべきは、恋愛詩集の基本的な時間の枠組みが、過去の出会いと愛に苦しむ現在であることだ[7)]。出会いは、愛の神の弓矢に射抜かれた日として比喩的に繰り返し描かれ、女性の眼も弓矢、神々しくも強烈な光として詩人を襲う。恋に落ちる自らを弓矢で射抜かれる子鹿に喩える美しい詩句（ソネット 49）も生まれる。

出会いはまた現実の時間の中に結び付けられる。まずペトラルカに、ラウラとの出会いを年月日まで明示している詩句がある[8)]。

折しも　1327 年の　朝まだき
4 月の 6 日　わたしは迷宮に
迷い込み　さて脱け出る術を知らず。（I, s.211, v.12-14）

ちなみにロンサールは出会いの年については、ソネット 98 の 1 行目で「1546 年」としている。月日を明示し、時の経過に言及しているのは以下のソネットだ。

おお自由よ、どんなにおまえが懐かしいことか、
おまえに去られて、
手ひどい責苦を受け
希望もなく悩み続けたあの日から。

愛の神も涙する
牢獄住まいになった 4 月 21 日から
一年が過ぎた。

だのに私はそこから脱れる
ただ一つの手段も見出せない（それほど縛めは強烈だ）
死によって私の死が死に絶えぬかぎり。（IV, p.18, s.14, v.5-14）

10 行目の「牢獄住まい」という表現は、5 行目から 8 行までの「自由」を失った状態と「責苦」という一連の流れを受ける形で選ばれただけではなく、「脱け出る術」のないペトラルカの「迷宮」を踏まえていることは明らかだろう。「一年」

7）Yvonne Bellenger, *Le Temps et les jours dans quelques recueils poétiques du XVIe siècle*, p.65
8）ペトラルカの引用は以下に拠り、第一部を表す I、ページ数、ソネットの番号、詩行の順で示す。Pétrarque, *Canzoniere/Le Chansonnier*, Classiques Garnier, 1988. なお和訳は、ペトラルカ（池田廉訳）『カンツォニエーレ』名古屋大学出版会、1992 をそのまま利用させて頂いた。

という、出会いからの時の経過を、苦しみとともに確認するのもペトラルカ同様だ。持続する愛とその苦しみは、日常の時の経過をものともせず続くと言うことか。ただし、ペトラルカの場合は、「始めて燃えたあの日から　天空は廻り廻って17年」（ソネット122）、「かくして20年　長く苦しい懊悩よ」（ソネット212）とラウラへの思いは生涯続く。この点ロンサールは、カッサンドルの後、マリー、エレーヌ、ジュヌヴィエーヴと様々な女性へ恋愛詩を捧げ、ペトラルカと違う道を辿ることになる。

以上、ロンサールの『恋愛詩集』（1552年版）では、カッサンドルというトロイ戦争の王女の名前をもつ女性を中心に生み出された神話的な時間と平行して、出会いの時から女性が詩人へ及ぼす力、そして愛の持続が一つ一つのソネットの枠を超え、詩集全体の時間を作り出していたことを確認した。

2. デポルト　対象と主体の不在

ロンサールの『恋愛詩集』から約20年後、1573年に発表されたデポルト（1546-1606）の『初期作品集』は好評を博し、翌年から増補改訂版が毎年のように出版される。平易で流麗なその詩はアンリ三世の宮廷で愛好され、その人気はロンサールを脅かすほどであった。

『初期作品集』に「ディアーヌへの恋愛詩集」というタイトルの恋愛詩集が収められている。ローマ神話のディアーナと同名ではあるが、女神と重ねられて女性が描かれることはほとんどない。ディアーヌという表現に限定しても、手稿から初出までは«madame»などという女性を示す一般的な語句が使用されているのだ。手稿以後、度重なる書き換えの過程でよってそれらの一般的な語句がディアーヌへと置き換えられているに過ぎない[9]。

デポルトの詩では、ディアーヌに限らず、女性が日常的な時間の中で具体性を獲得することはほとんどなく、また恋愛を語る主体（恋する詩人）の意志も希薄であり、その詩的世界は極めて抽象的だ。カステラーニをはじめとする研究者がデポルトの恋愛詩を、対象なき詩、主体なき詩と評するのも納得できる[10]。

(1) 対象の不在

女性の不在を嘆く詩はプレイヤード派の恋愛詩でもしばしば取り上げられたが、デポルトの恋愛詩では存在感のある形で女性を描く詩行が少ない上に、愛する女性の不在を嘆く詩が多い。

以下は、女性と一晩会えず、長い夜を過ごした際の詩句だ[11]。

9）濱田明「ディアーヌとデポルト」『シュンポシオン―高岡幸一教授退職記念論文集―』朝日出版社、2006, pp.395-404.

10）G.Mathieu-Castellani, *Les Thèmes amoureux dans la poésie française*（*1570-1600*）, Klincksieck, 1975.

11）引用は以下に拠り拙訳を試みた。Philippe Desportes, *Cléonices. Dernières Amours*, éd. V.E.Graham, Droz, 1962. Philippe Desportes, *Élégies*, éd.V.E.Graham, Droz, 1961. Philippe Desportes, *Les Amours de Diane, Premier Livres*, éd.V.E.Graham, Droz, 1959.

ああ、一晩どころではない、過ぎたのは一世紀だ、
あの人の美しい目が私を光のない場所に置き去りにしてから。
季節や、年について話すのはもうよせ。
時を月や日々で数えるのは、
哲学者や、暇な人間たちにまかせておこう、
私といえば、欲望で数えるだけだ。（*Cléonice*, p.13, s.4. v.9-14）

また、女性と会えなかった三日間を振り返る次の詩句も、同じ着想によると言えよう。

この三日というもの、どれ程の思いに悩まされたことか。
三日などではない、三千年だった。（*Elégies*, p.25, III, v. 33-34）

愛する女性の不在が長く感じられるのは当然であり、ペトラルカに倣ったルネサンスの詩でも女性と会えない苦しみを嘆いた。しかしこのデポルトの詩行では、不在の際の時間の長さそのものが焦点化されている。一晩を一世紀に、三日間を三千年と言い換えるその表現自身に趣向を凝らすデポルトのこの手法はマニエリスムと形容するにふさわしい。

(2) 主体の不在

恋愛詩における対象、すなわち女性の不在は、同時に主体の欲望の方向を不明確にする。相手の女性が不在である時、主体の感覚は麻痺し、外の世界を感じる力、時間の感覚も失われる。恋のために理性を失った状態を歌う詩句は従来の詩人にも見られるが、以下のデポルトの詩句には緊張感が希薄である。

昼は私には昼ではない、何も見えないのだから、
私に喜びを与え、希望を抱かせるものが。
夜も私には夜ではない、休むことも出来ず、
夜に、苦しみが増すばかりなのだから。（*Diane I*, pp.124-125, v.17-20）

以上のように対象が不在であるデポルトの詩における時間は、ペトラルカやロンサールに見られた出会いと現在との緊張の中にある時間ではなく、また自然や日常の具体的な外界と結びつく時間でもない。対象を失った主体は、持続する愛ではなく、弛緩した時間の中で、ただ饒舌に時の経過を語ることに興じるのだ。

3. 愛の終りと恋愛詩集の終り

現実の恋愛における時の経過は、出会いに始まり別れで終るとして、16 世紀の恋愛詩集では、出会いは繰り返し語られる一方、別れが具体的に語られることはない。ペトラルカの場合、ラウラが亡くなった後でも、昇天したラウラを慕う詩

を書き続けた。ロンサール場合、1552 年の『恋愛詩集』では、カッサンドルへの愛は、前述したように出会いから現在まで持続する愛である以上、終わりを迎えることはなかった。愛が時に勝つ、すなわち永遠の愛がペトラルキスムの愛と言えるだろう。しかし、1553 年の『恋愛詩集』第二版の補遺として収められ、フランス人に愛唱される「カッサンドルへのオード」では、1552 年版とは異なる時間の意識が見られる。

さあ、可愛いひとよ、
私の言葉を信じるなら、
あなたの齢が花の盛りに匂う間に、
摘めよ、摘め、あなたの青春を、
この花のように、老いて、
あなたの美も曇るから。（V, p.197, *Ode à Cassandre*, v.13-18）

このようにホラチウス以来の carpe diem「日々を楽しめ」と歌うとき、前提となっているのは、若い娘から老女へ至る人間の一生の現実な時の経過である。これまで見てきたような、出会いの日から愛の神と女性の非現実的な力が支配する恋愛の時ではない。そこでは、詩人はもはや「牢獄」に閉じ込められることなく、自由に動くことが出来るのだ[12)]。

愛の終りと恋愛詩集の終りが運命的に結びつく例として、プロテスタントの闘士かつ詩人のドービニエ（1552-1630）の恋愛詩集『春』の「ディアーヌに捧げる百頭の牡牛の生贄」が挙げられよう。1570 年代初頭、人生の春である青春期に書かれた恋愛詩は、晩年の『冬』と異なり 19 世紀まで未刊のままだった。時の経過という点では、題名の『春』から連想されるように、ソネット 82 から 86 は四季の移ろいに触れている。しかし春が言及されるのは二回にとどまり、「一夜のうちに凍りつく春」と束の間に消える愛が歌われる。自然の時間である季節も、強調されているのはむしろその異常な気候である。

ソネット集は、難破、戦争などの同じ比喩で幾つかのソネットがまとめられ、瀕死の兵士に自らを重ねる（ソネット 14）など、息苦しい緊張感が支配している。ソネット集のタイトルが通例の「ディアーヌへの愛」ではなく、「ディアーヌに捧げる百頭の牡牛の生贄」«hécatombe à Diane» であることが詩集の終りにとっては、重要な意味を持つ。百のソネットは、女神への百頭の牡牛と同じく、生贄として捧げられる運命にあるのだ[13)]。

私は燃やす、魂の赤い血とともに、

12）Yvonne Bellenger, *op.cit.*, p.75.
13）引用は以下に拠り拙訳を試みた。Agrippa d'Aubigné, *Le Printemps, L'hécatombe à Diane et les Stances*, éd. H.Weber, P.U.F, s.d. なお、プレイヤード版に収められた 52 編のソネットについては加藤美雄の既訳があり、雑誌『流域』に連載後、加藤美雄『ドービニエと二〇世紀の詩人たち』編集工房ノア、1999 にまとめられている。

殉教に捧げられた百の恋愛ソネットを、
ヘカテーの女神に憧れながら、呻き声をあげ、
ほんの少しの苦しみしか書くことが出来ないとはいえ。(p.164, s.96, v.1-4)

そして、詩集の最後のソネットでは、既に命尽き、この世にいない私の代わりに「私の心臓」が愛の裁判に持ち込まれる、

私の最後の日の後、愛の法廷には、
火傷を負った心臓が運ばれ、
誰がこのような奇怪な仕業を行ったかを知るために、
皆に晒され、傷口が人々の目を引くことだろう。(p.168, s.100, v.1-4)

このように、ドービニエは、出口の見えない愛を書き連ねた果てに、過去の出会いと現在の苦しみを嘆く図式を放棄する。そのためには、女性からの拒否や恋愛の世界の論理では十分ではなく、生贄の儀式、裁判など恋愛の世界を超えた制度が導入されることが必要だったのだ。この時、恋愛詩集でありながら、恋愛の時間は他の制度の時間によって相対化されることになる。

おわりに

16 世紀後半に限っても、賛歌、論説詩、宗教詩など詩集の種類は多く、本稿が取り上げたのはその一部に過ぎない。宗教的叙事詩であるドービニエの『悲愴曲』では、フランス 16 世紀後半のプロテスタントの苦難と神による救済が、同時代の歴史だけでなく、聖書、古代ローマの歴史など壮大な時の経過の中で語られる。

本稿では、デュ・ベレーのローマ詩篇からルネサンスの時代意識を、また恋愛詩集における時の経過を確認した。恋愛詩集については、ロンサールの 1552 年版『恋愛詩集』と、デポルトやドービニエの作品の違いが強調される結果になったかもしれない。もっとも、1553 年以降のロンサールの作品には別の時間を読み取ることが出来るし、またペトラルキスムの反動として、デュ・ベレーの「ペトラルキスト反論」や、ジョデルなどの詩を忘れるわけにはいかない。しかしそれらは詩集としてモデルとなることはなかった。その点、ペトラルカの『カンツォニエーレ』の流れを汲むロンサールの 1552 年版『恋愛詩集』には、過去の出会いと愛に苦しむ現在という恋愛詩集の基本的な時間の枠組みが明確に示されていた。16 世紀後半の恋愛詩集における時の経過については、その枠組みを出発点に作品を分析することが有効であろう。

(熊本大学准教授)